

殺人の祭壇

森村誠一



殺人の祭壇

森村誠一

江苏工业学院图书馆
藏书章

講談社

殺人の祭壇 定価一三〇〇円(本体一二六二円)

第一刷発行 一九九二年五月二十八日

著者 森村誠一

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社 講談社

〒112 東京都文京区音羽二―一二―二一

電話 編集部 〇三―五三九五―三五〇五

販売部 〇三―五三九五―三六二二

製作部 〇三―五三九五―三六一五



印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛てにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第二出版部宛てにお願いいたします。

© SEIICHI MORIMURA 1992 Printed in Japan

殺人の祭壇

目次

夢の追跡	7
沈められた死	22
愛護の終末	32
生きている被害者 ^{ホトケ}	61
離島の特産物	82
交換された証拠	92
接触した恐喝	111

センチメンタル・ジャーニー

136

孤独な喪主

145

後暗い結婚

169

弱味の診断書

185

同じ穴のモルモット

205

喪失した完全犯罪

218

遅すぎた悟り

242

装画 装幀

野中 昇
安彦 勝博

殺人の祭壇

夢の追跡

1

北村直樹^{きたむらなおき}は久しぶりに目覚めのよい朝を迎えた。年齢を重ねてくるにしたがい、重苦しい夢ばかり見るようになる。

深い奈落へ落ち込んでいく夢、暗い穴に閉じ籠められた夢、胸の上に乗った小石が、しだいに大きくなって圧^{おさ}しつぶされた夢、外へ出ようとすると、屋根が頭の上に伸びてきて、どこまで行っても青空の下へ出られない夢、行列について歩いている間に、いつの間にか暗闇の中に一人だけ置き去りにされてしまった夢など、明るく楽しい夢を見ることがなくなった。

世間の人々に比べて、それほど不幸な生活をしているわけではない。彼以上に強いストレスの波の中にもまれている人は多い。まずは平均的日本人の生活をしているつもりだが、若いころのような明るい夢が見られなくなったのは、それだけ生活が複雑になっているからであろう。

若いころにもそれなりの苦しみや悩みがあった。だがそれはあくまでも自分一人の問題にかぎられていた。親がかりの時代、あるいは独身のころは、苦しみや悩みが自分一人の問題に限定されていた。他人のことまで考えるゆとりがないというより、視野が狭いのである。その狭い視野

の中で精一杯苦しんだり悩んだりしていたものである。

それに耐えきれず、若い蓄を自らもぎとってしまふ者もあるが、年齢を重ねた後から振り返ると、決して自ら死を選ぶほどの問題ではなかった。頭上の空を通過する雲が一時期陽の光を遮つた程度の悩みが、一生つづくとおもひ込んで、絶望する。

若いころの苦痛や煩悶は、通過する雲でしかない。その雲も単層である。年齢を重ねるにしたがい、頭上を覆う雲は多層になり、面積が広くなる。雲の上に雲が幾重にも重なり、太陽の光を直接浴びることが少なくなる。

それが、昨夜は久しぶりに楽しい夢を見た。北村は学生時代に返っていた。親しいサークルの仲間と一緒にどこかへハイキングに行った夢であった。視野のかぎり青空が広がり、太陽の光が弾んでいた。地平線には青く霞んだ山々が連なり、草原に放牧の牛が草を食んでいた。

グループの中には彼が密かにおもいを寄せていた梶村今日子がいた。今日子は全学の偶像的存在であった。彼女がキャンパスの中を歩くと、常に注目の的となり、男子学生から口笛が吹かれた。北村より二年下級生であったが、彼女が北村の所属する民俗研究会に入会して来たときは、嬉しくてその夜眠れなかったほどである。

今日子はそれほど熱心な部員ではなかったが、それでも年二、三回、部の主催する民俗研究の旅行に参加した。彼女が参加するとなると、男子部員の参加者がぐんと増えた。彼女と共に行つた、高山や、津和野や、角館の旅がいまでも青春の幻影のように北村の精神の最も大切な個所にしまい込まれている。

もっとも、シャイな北村は旅行先でもめったに彼女に声をかけるようなことはしなかった。「行すゑは誰肌ふれむ紅の花」と詠んだ芭蕉の句のように、自分にはしよせん縁のない美しい花

として距離をおいて見守っていたのである。

その梶村今日子と数人の小グループでハイキングに出かけた夢を見た。彼女はグループの中で北村に最も親しげな声をかけてきた。グループの者も兩人の間に成立した親密なコミュニケーションを察知して、彼らなるべく二人だけにするように気をつかってくれた。

今日子は夢の中で北村に尋ねた。

「北村先輩は、卒業後どんなお仕事をされるつもりですか」

と問われても、北村には翌年の卒業を控えてまだ確たる方針が立っていなかった。自分が果たして社会へ出てやっていけるのかどうか、自分には生活力があるのか、そんな不安と、全世界を斬り取るかのような途方もない野心とが同居していた。だが北村は緻密に自分の人生設計ができるような人間ではなかった。

野心と不安をないまぜにして、ところてんのように大学から社会へ押し出されていく日を漠然と待っている。もともと彼にとっては大学生活が、社会へ出るまでの四年間のモラトリウムであった。

「小説を書きたいとおもっているんだ」

北村は答えた。だが、いきなり小説を書くことを職業とできるものではない。北村がまがりなりにも作家として自立するようになるまで、大学を出てから十年以上の紆余曲折があった。

自分の中にそのような才能があるとおもっていなかった。ただ読書が好きであったので、将来は漠然とそのようなものになりたいと願っていたのである。

「まあ、素敵」

北村の答えに、梶村今日子は目を見張ったようである。

「私、以前から北村先輩はきつと作家になるとおもっていましたわ。先輩がクラブ誌に書いた高山や津和野の紀行文を読みましたけれど、私、とても感激したんです。それ以来先輩の作品の愛読者なんです」

今日子は言った。

「愛読者とはオーバーだな」

北村は苦笑した。

「先輩が将来大作家になったとき、私が第一号の愛読者だったことを忘れないでくださいね」

今日子は謎を含んだような陰影の濃いまなざしで北村の顔を覗いた。そこで目が覚めたのである。

北村は目覚めた後も、おいしい料理の後味を反芻するように、いま見た夢を何度もおもい返していた。当時、二十歳前後の青春の生氣に弾んだ今日子の面影と、その言葉が、北村の瞼裏と耳に実際に見たものの残像のように、直接聞いた声のように生々しく残っている。

（あの言葉は、もしかすると今日子の愛の告白だったかもしれない）

北村は夢の中の言葉を自分の都合のよいように解釈した。夢の中だけのことではなく、学生時代今日子は北村に密かな思慕を寄せていたのかもしれない。北村が気がつかなかったのか、あるいは気がついていても、持ち前のシャイな性格から、そんなことがあり得るはずがないと自ら否定していたのかもしれない。

二十数年以前の青春の追憶は、青い霞みのように烟っていて、その実体を見届けるすべがない。だが北村は夢の中の今日子の自分に向けたまなざしが気になった。彼女は実際にあんな目つきで自分を見てくれたのだろうか。だれにでもあんな目をして見たのか、あるいは自分だけ

に伝えたかった特別の感情を塗り籠めたまなざしの色であったのか。

学生時代のアイドルに夢の中で再会して、北村は昔をいまに返すすがもない青春の追憶を追いかけていた。

「あなた、今朝はなんだかとても嬉しそうね」

朝食のとき妻が北村の顔色を読んだ。

「そうかな、いつもと同じはずだが」

北村は少しうろたえた口調で答えた。べつにやましいことをしたわけではないが、若いころの片想いの亡霊の影を妻に読み取られるのは、後ろめたいおもいがしなくてもない。

そのまま何事もなければ、文字どおり夢の中で見たこととして忘れられてしまうはずであった。

二日後北村は書庫に入って作品の執筆に必要な資料を調べていた。狭いスペースに大量の本をつめ込んでいるために、資料のファイルおこたを怠ると、必要なときに必要なものがすぐ出てこない。

書庫の隅にうずくまって、古い資料をがさがそ探しまわっていると、頭上からばさりと落ちてきたものがある。際どいところでかわ躲したが、分厚い本なので、直撃されるとかなりのダメージを受ける場所であった。見ると、古いアルバムである。二十数年前の学生時代のアルバムであった。

何気なく取り上げてバラバラとページを繰る。アルバムには変色した懐かしい写真が貼ってある。北村も若かったが、友もみな若々しい。ああ、おれにもこんな時代があったのだなあと、北村は書庫へ入った当初の目的を忘れて、しばし二十数年前の世界にタイムスリップした。

古いアルバムの中に、まぎれもなく北村の青春が定着されていた。書庫の片隅に二十数年間かき顧

みられることなく閉じ籠められていた青春である。アルバムのページを繰っていた北村の目が、一葉の写真に固定した。

「これは梶村今日子じゃないか」

サークルで旅行したときのスナップであろう。今日子を囲んで数人の仲間たちがそれぞれのポーズをしている。広々とした高原の一角らしく、背後には高い山の連なりが薄く霞んで見える。夢の中の光景そのままであった。

「梶村今日子、いまはどこでどんな暮らしをしているだろうか」

北村は薄暗い書庫の一隅に佇んで、過ぎ去った青春の幻影のような女の行方を想像した。元気でいれば四十代半ばに達しているはずである。子供も二、三人いるかもしれない。

「そうだ、彼女から結婚したという通知がきていた」

北村はおもいだした。卒業して数年後、彼女からそんな通知を受け取ったような気がする。大学を出てから、父親のコネクションにすがって、中ごろの建設会社に入社した北村は、文学とはまったく縁のない場所に身を置いて毎日鬱々と過ごしていた。そんなとき青春のアイドルから届いた結婚通知状は、彼の青春の残影に終止符を打つようなものであった。

まだ社会に身の置きどころを得ず、潜在的失業者のような北村に対して、彼が青春の祭壇にまつた女神を独占しようとしている男がある。北村は今日子の結婚の相手が無性に妬ましく腹立たしかったのをおぼえている。

今日子のような女と結婚する男は、すでに社会に不動の位置を占め、人生を積極的に生きている男にちがいない。だいたい青春の女神が、ただ一人の男に専属し、彼と継続的性関係をもつことが信じられなかった。

北村の女神は、結婚することによって地上の女に還元したのである。それ以後北村は梶村今日子を自分の意識から追い出した。そして二十数年経過して、彼女に「再会」したのである。

北村はその分齡をとっていたが、今日子は当時のままである。美しく若々しく、青春の生氣にはち切れそうである。もう一度梶村今日子に会いたい、彼女の実物に会いたいというおもいが、衝動のように北村につき上げてきた。

会ってどうしようというつもりはない。ただもう一度会って青春の女神の行方を突き止めたいただけである。会わないほうがよいともう一人の自分の声が言った。だがいまは会いたいというおもいが圧倒的に強い。

これまでの半生、前方のみを見てたがむしろに進んで来た。だがふと緊張が緩んだ瞬間、過ぎ来し方を振り返り、若いころの美しいおもいでをもう一度探ってみたいとおもうことがある。当時はそれを少しも美しいとはおもわなかった。

通り過ぎてからそれがどんなに貴重な人生の宝石であつたかおもい知らされるのであるが、青春の真ん中にいるころは、むしろ若さがうつつとうしく重苦しい。いまはそのひとかけらも得られない青春という宝石を、それこそ石ころのように乱費してしまったのである。

北村がそんな気持ちになったのも、そういう年齢に達したからかもしれない。

彼は古い住所録を探した。もし彼の記憶に誤りがなければ、その住所録に彼女の結婚通知に記載されていた住所が記入されてあるはずである。

「あつた」

長い時間をかけてようやく古いファイルの束の中から探した住所録に、彼女の当時の新居が記入されていた。結婚して彼女は北条と姓を改めていた。彼女の新しい住所は、旧姓の欄に記

入されてあったので探しさせたのである。

今日子の結婚後の住所は埼玉県武相市となっている。武相市ならば北村の家から近い。だが彼女が二十数年後の今日も同じ住所に留まっている保証はない。

（やめたほうがいい）

ふたたびもう一人の自分の声がささやきかけた。女神は永遠に女神であらねばならない。いまさら青春の祭壇から地上の女に還ったかつてのアイドルを追いかけて行って、美しい追憶に止どめを刺すことはないだろう。もう一人の自分の声が諫めたが、女神の行方を突き止めたい衝動をこらえられなかった。

二十数年ぶりに梶村今日子の夢を見て、その二日後、アルパムの中で彼女に再会した。これにもにかの因縁であろう。もしかしたら彼女が自分を呼んでいるのかもしれない。彼女が困難な状況に陥っていて、北村に救いを求めているのかもしれない。そうおもうと、居ても立ってもいられなくなった。

幻滅でもよい。梶村改め北条今日子に会いたい。おもえばこの歳月、北村は彼女への想いを、債務のように心に抱えてきたのである。

2

武相市は埼玉県のほぼ中央に位置している。武蔵野台地の北端にあり、西から北にかけて入間川、東縁を荒川が流れている。江戸時代、江戸の前衛として小藩ながら徳川家に由縁の深い重臣が領主となった。江戸とは街道と水運によって結ばれ、明治以後商業の中心地として栄えた。